

資料 (一)

梅牟禮攻め

「大友興廢記」より抜書き

其後、臼杵近江守長景侍大将にて、國中二萬餘の勢を、大永七年（法正五三）丁亥十月上旬に、佐伯梅牟礼の城へ差向はる。既に先手は野口山より小倉山、小田の峯までつづいて陣を取る。又赤木山、宮河内山に至るまで、すさまじく陣を張りつづけたり。河保寺山を近江守本陣と定め、平井山、上野山、其外の谷峯陣所ならずと云事なし。既に関をどつと擧れば、城中よりも関を合す。其声川にひびき峯に答え、谷を通じて雷電震動し、鳴落るが如し。

此梅牟礼の城は、峯高く聳えて谷深し。敵近付べき標更にまし。兩陣既に矢合せして、日々忘々の軍に攻を以て攻めれば、城内衛かへてこれを防ぐ。或時敵七ツ堀口へ打出る。城中より深田一党の者ども進出て名乗る。標は、伯耆守府内千手堂において討る。其恨を矢一筋と罵りて、敵の矢にも恐れず、身命を惜まず、差詰々々射る程に、魁の敵を矢度五六騎射伏する。味方に手負二三人あり。敵展陰を伝い引退く。味方も陣所へ引あがる。又、或時城内の兵麓近く出て、大木・伏木・岩根を楯に取、矢矢ぬきといて敵を待居たり。敵も皆歩立に成て、手楯をついて近付より、互に差詰々々射る。去れども敵の矢は、大木・伏木の中にもあり、岩根に砕くるもあり、人の中も矢日掃をり。又城中より射手をすぐり、敵の左右に廻し、差の尻端かしこの谷あひより、横矢を



梅牟礼古城址遠望

以て射扱われ引退く時もあり。惟治金の圓扉を持ち、大手、搦手を周回し、四方を下知し給ふ。其のいさめに付て堅固に防ぎ戦ふ。殊更城中に多田七郎兵衛尉、塩月、野々下など云究竟の強弓あり、これ等を先として、勇士数輩我先にと進出て戦へば、城中は七ツ堀口、此所彼所毎度の軍に利を得たり。

敵は度々の合戦に、十騎廿騎討れざる事なし。臼杵近江守は武略の上手にて、此城の堀を死人を以て埋め、雲梯を調へ飛橋を作し、是を以て攻ると云ども、左やすく落べしとは覺えず。多勢を討せては詮なし。武略にはしかじと思ひ、矢留せよ不使者を出して、今戦ふこと私の宿意にあらず、御下知に依て上と重んずるの勇氣なり。暫く日州表へ立進れ、目を隔て御逆心なき旨仰分られ候へ。御謀叛なき通は、此長景に任せられ候へ、申達すべき由再三使者を以て其意趣を申し分共、惟治返事に、罪なきに、かく召掛らるる上は、後度と戦場の威を上げまし、天運を相待つより外別条更になしとて、其儀に同じられず。長景巧を誉えて再三使者を以て、最新申入候趣き、聊か憐りなき由、牛琦法印の裡を汚し、起請文を書て送る。其時惟治誓文と疑は、仏神を軽するに似たりとて、長景が言葉に同ぜられ、僅かの小勢にて、千代鶴殿諸共に日州へ退散なり。相成る武士は降人となる。敵勢の中は傍若無人の者有て、此度の降人は、皆具足甲をぬぎて渡せと云ども、降人の中より安藤などと云者を先として、数多氣早なる武

士進及出て甲を脱ぎ弓法をばすし、降人になるは昔より
強幹の法也。具足甲を敵に渡す法は珍敷事なり。是非具
足が欲しくば、大將に渡さんとて、近江守に投掛て腹か
き破り失せたりき。

資料 (四)

佐伯 惟治

「豊後遺事」(加藤賢成)による

大友到明公(大友宗麟の父義鑑)ノ時、梅牟礼城主佐伯惟治
ノ謀叛ヲ譖スル者アリ。公、臼杵長景ニ命ジテ之ヲ討セ
シム。

梅牟礼城固ヨリ險ニ、士卒亦勇ナリ。長景屢攻ムレド
モ勝タズ。因テ人ヲシテ惟治ニ言ハシメテ曰ク、此戦ヤ
私憾アルニ非ズ。タダ公命ヲ以テノ故ノ故ノ故。予誓ク去テ
日州ニ遁レバ、我レ子ノ為メニ其ノ寃ヲ白セン。

惟治之レニ從ヒ、城ヲ委シ、去テ日州三河内ニ至ル。
長景密ニ近傍ノ諸氏ニ諭シ、之ヲ要撃ス。從士野々下右
馬丞、銚原監物等拒ギ戦フ。惟治間ヲ得テ自殺ス。時ニ
大永七年十一月二十五日ナリ。

其後、惟治ノ靈、崇リヲナス。土人祠ヲ立テ富尾神ト
称シ、歲時祭祀ス。

(四) 梅牟礼城 (唐橋世濟「豊後国志」による)

佐伯基古市村ニ在リ、山險ニシテ草樹叢茂シ、山上鞍平
ニシテ要固ノ地ナリ。

大永中、佐伯護守之ニ拠ルモ、今ハ廢ス。

資料 (三)

梅 城 明石秋室

女狐青冢前頭嘯

(女狐青冢の前頭に嘯き)

怪鵞黒松深裏棲

怪鵞、黒松の深裏に棲む。

藤蘿未縛一翁仲

藤蘿未縛す一翁仲

沙上蝕餘殘蕨蕪

沙上蝕餘す殘蕨蕪

千年古墨雲旗出

千年の古墨に雲旗出で

半夜陰風鬼馬嘶

半夜の陰風に鬼馬嘶

英魂叱咤衆魂起

英魂叱咤して衆魂起す

扶得秋声作鼓聲

扶得秋声作鼓聲

梅 嶺 秋月橋門

臨風長嘯恨依々

(臨風長く嘯いて恨み依々)

千古英雄一夢非

千古の英雄一夢非ず

荒墨樓狐埋乱艸

荒墨に狐樓んで乱草埋まり

残碑戴鶻立斜暉

残碑鶻を戴いて斜暉に立つ

或伝冤血夜深後

或いは伝う冤血夜深後

凝作寒憐兩裡飛

凝って寒憐を作し兩裡を飛ぶ

壯士何堪慷慨切

壯士何ぞ堪えん慷慨の切なるに

野花折取祭墳帰

野花を折り取って墳を祭つて帰る

梅牟礼登山 案内承ります

三四人ほどで水は、二部合より日時にしよに登ります。
午前中、または午後半日で可。本会事務所まで、電話でどうぞ。